ダルニー通信

68
2012
冬号

民際力でメコンの子どもたちに教育を
25 Anniversary
SINCE 1987

特集

民際センター
四半世紀の景色（ことば編）

- ユニークな活動をする５つの大学生のグループ
- 書き損じハガキで支援する企業・団体・学校
- ミャンマーとベトナムで1回目の奨学金授与式

民際センター四半世紀の景色（ことば編）

前号では写真で25年間のタイ・ラオス・カンボジアの風景と活動を振り返りました。今号では、ダルニー通信に掲載された「ことば」で25年間を振り返ります。支援活動をする子どもたちや事務局でお手伝いをしていただくボランティア、現地の子どもたちの実情を見た旅行参加者たちの熱い言葉、また支援を受けた奨学生やその家族、元奨学生などの感謝の声に、支援に対する気持ちが新たになります。

茨城県の県知事賞を受賞した中学生の作文から「僕はタイで生まれ、3年前までタイで生活をしていました。タイはたくさんの問題を抱えています。中でも子どもの問題はとても大きな問題で・・・大人になったら、もっともっといろいろな国を見てみたいと思います。そして、身に付いた知識や考え方を、タイをよくすることに役立てたいと思います。子どもたちと僕の明るい未来をつくるために」
（ダルニー通信22号）

佐久平ダルニー連絡会の柳沢さんはタイに赴任中、社内で働くタイ人社員に出した業績表彰の賞金を利用して、支援している奨学生にバンコク修学旅行をプレゼント。その際、先生と生徒にあげたお小遣いについて、「ほとんどの子どもたちは両親に渡すために、このお金には手を付けませんでした。子どもたちは両親にもらったお小遣いをそのまま渡すことに喜びを感じ、先生はそのお小遣いで生徒の面倒を見ることに喜びを感じていました」
（ダルニー通信23号）

タイに行き、東北地方の村に2泊した高校の感想。「バンコクに戻って、貧富の格差にあらためて驚いた。やせ細ったストリートチルドレンや物乞いをする障がい者。同じ人間なのに、生まれた場所が違っただけでどうしてこんなにも違う人生になるのだろうと思った。・・・日本とタイの関係について無関心でいるのではなく、常にアンテナを張り巡らして、できることをやっていきたい」
（ダルニー通信24号）

長野県のドナーが支援を始めた動機。「私は自分に子どもがいるからドナーになったんです。・・・自分の子どもが小学校に通う年齢になると『この年で働いている子がいる』『この年で風俗産業に売られてしまう子もいる』ことを放っておけなくなりました。何もしないことは、認めてしまうことになるから」
（ダルニー通信25号）

民際センターの15周年記念で来日したタイの元奨学生のポットさんが15周年のイベントでスピーチ。「奨学金は、貧しいから、農民の子どもだから、女性だから、という理由だけで偏見を持つ人々に打ち勝つ勇気を与えてくれました。（支援者の）玉井さんは、沈んでいた私を水の中から引き上げてくれたのです」（ダルニー通信29号）

民際センター四半世紀の景色（ことば編）

書き損じハガキで支援している多摩養護学校（現多摩桜の丘学園）の生徒の感想。「体の硬い私たちは、人に助けてもらったり、みんなに世話してもらったりして、（自分では）何もできない。でも私たちはたくさんのハガキを集めることやみんなに協力してもらうことはできる・・・体がいいのに勉強できないのはかわいそう。タイの人にたくさん（奨学金を）あげたい。何かやれると私たちもうれしい」（ダルニー通信32号）

団体設立のきっかけとなり、現在、タイの事務局（EDF）で働いているダルニーさんが2004年に来日し、報告会を開きました。「貧しくて成績が良くなくても、勉強したい子どもはたくさんいます。また、どんな子どもにも夢見る権利があります。こうした子どもを切り捨てないダルニー奨学金に関われてとても嬉しいです」（ダルニー通信34号）

支援している奨学生に会いにご夫妻でラオスを訪問した作家、阿刀田高さんの感想。「子どもたちは異口同音に『学校へ来ることが楽しい』と言う。みんなの目が光っている。訪問者に対して、つぶらに輝く視線を・・・・・だれ一人の例外もなくヒタヒタと注いで、一久しぶりだなあー日本ではなくなった風景だ。一途な眼差しに圧倒された」（ダルニー通信33号）

事務局にボランティアに来ていた女性。「ダルニー奨学金のことは新聞で知った。当時、我が家は家のローン返済と子どもの教育費の出費があったが、建康であることに感謝しながら精一杯生きていた。新聞の記事はそんな我が家の状態とはあまりにも大きくかけ離れた環境にいる子どもたちの状況が報じられていた。中学校に進学して勉強したいという子どもたちの思いは、戦後の混乱に生き、親の経済的な困難を子どもながら見てきた私に痛いほどよくわかった。家族と話し合って支援を決めた」（ダルニー通信36号）

20周年で理事長の秋尾と対談した作家の保坂正康さん。「戦後、日本が経済的に潤った理由は米国の支援や朝鮮戦争による特需という幸運もあり、さらに他国が日本製品を買ってくれるという他国との関係が成立して初めて達成できたという面もあると思うのです。だから日本の富を国内だけで享受してようとは思いません。・・・日本は自らの勤勉さで経済成長を達成したというエゴイズム的論理があるうように思えます。他国の経済発展を支える際、日本はその支援のメカニズムはすぐ作るのですが、そのメカニズムを支える思想・文化的価値観はまだ確立していないという印象を持ちます」（ダルニー通信48号）

民際センター四半世紀の景色（ことば編）

校舎建設を支援したデ・シェンさんが校舎建設の意義を投稿。「識字率の上昇は経済発展にもつながるはずです。しかし、私には他にも利点があるように思います。文字が読めるようになるということは、遠くにいる人や昔の人の考えを直接に知ることができ、視野が大きく広がります。21世紀の地球が一番必要としているのは、民族や国籍の境界を超えて人類全体を自分の民と思える人物かもしれません」（ダルニー通信44号）

ラオス事務局（EDF Lao）のプロジェクト部長をしているジョイの自己紹介。「私の家は貧しい農家でした。父は小学校2年生まで、母は学校に行くことができませんでした。でも教育には熱心で『お前たちの時代は頑張って勉強すればちゃんとした生活ができる』と両親（特に母）は励ましてくれました」（ダルニー通信53号）

両親がいないため、祖母の家に引き取られたカンボジアの奨学生とそのおばあさんにインタビューした際のおばあさんの言葉。おばあさんは自分の家族も含め14人家族を食べさせていた。「孫にはできるだけ教育を受けてもらいたい。そのために、私は死に物狂いで働く、としてしか今は言えません」（ダルニー通信52号）

1994年の研修旅行に参加してタイの子どもたちの現実を知り、それがきっかけで現在、国際協力活動の分野で活動している山梨英和の卒業生、渡邉美奈子さんの投稿。「ダルニー奨学金で人生が変わったのはタイの子どもだけではありません。私もその一人です。・・・『タイで仲良くなったあの子は高校に行けないかもしれない』。そう考える度に涙があふれてきました。貧富の差という大きな壁を見のあたりにして、お金も技術もない自分になにができるだろうと悩んだ末、出てきた結論は『学校に行きたくても行けない彼らの分まで一生懸命勉強して、学んだことを将来タイの人々に還元すること』。そう心に誓い、国際協力の道を歩み始めました」（ダルニー通信49号）

奨学生30万人目のイベントで、ご自身が支援する奨学生と会ったタレントの向井亜紀さん。「2003年秋に代理出産で双子の男の子を授かることができたのですが、それまでの長い心の戦いの中で、ダルニー奨学金のように、『 子どもを大切に思う気持ち、彼らの未来や夢を応援する気持ちを、こういう形で表すことを忘れないようにしておこう』と考え、2003年春から支援を始めました」（ダルニー通信56号）

民際センター四半世紀の景色（ことば編）

投稿してくれた支援者。「日本人以前に、困っている人がいたら手を差し伸べるだけなのです。どの国の子どもたちも将来を担う大切な存在。そういう子どもたちに教育の力をつければ、争いごとも減るでしょう。今はもう日本人だけなんて言っている時代ではないのです」
（ダルニー通信54号）

2009年にラオスを訪問し、自ら支援する奨学生に会った作家の故立松和平氏は帰国後、ラオス訪問の報告をしました。「僕はこの子のドナーとして3年間、奨学金を提供しますが、提供したからといってエライなんて思わない。受けた側もへつらわない。対等の関係です。僕たちの滞在中、村の人たちが気持ちをひとつにして僕たちに寄り添ってくれたことが、とても尊い事のように感じました」
（ダルニー通信56号）

新潟ダルニー連絡会の赤石さんのインタビューから。「今現在、言える事はこの活動が私自身の『生きる理由』の１つにいつの間にか加えられたことでしょうか。それに、奨学金を必要とする現地の実情を知っての活動は決して難しくはないけれど、知っていながら活動しない自身を許すのは至難の業です」
（ダルニー通信55号）

兵庫県で支援活動をしているハッピーマザー21。「新聞でダルニー奨学金のことを知り、早速、書き損じはがき収集に取り組みました。自前でチラシやポスターを作り、近所のお店やマンションの管理人さんにお願いしてポスターやはがきを入れる箱を置かせてもらいました。自治会で呼びかけたり、友人知人宅をお訪問してタイやラオスの実情を訴えたりするうちに、いつしかタイやラオスのお母さんになりきっていました」
（ダルニー通信26号）

夫婦でラオス旅行に参加し、校舎建設を決意した佐藤博さん。「私は50年前に匿名で東京の一女教師から『あなたの読みたい本代の足しにして』と毎月1000円送ってもらった。今日の自分があり、ラオスの子どもたちに会えたのもその人のお陰である。私は貧しかったので色々な人のお世話になった。その人たちへの感謝と恩返しを含め、妻と2人で小学校新設の手助けをし、子どもたちの縁の下の力持ちになろうと決意を新たにした旅立だった」
（ダルニー通信42号）

25周年記念対談

メコン地域の教育と

秋尾　晃正　　一般財団法人民際センター理事長
サンペット　　EDFタイ専務理事、メコン・サブリージョン議長
カムヒアン　　EDFラオス理事長
チャンディ　　EDFカンボジア理事長

秋尾

サンペット

秋尾　日本とタイは25年、ラオスは17年、カンボジアは9年、そしてベトナムとミャンマは本年度から奨学金を開始しました。設立25周年に際し、インターネット上で4者で「過去・現在・未来」について思いを語りあいました。

経済発展が貧困削減の鍵

サンペット　25年前のタイ東北地方（イサーン）は経済的に貧しく、タイもODAの受益国だった。この25年間の日本企業の進出は著しく、日本企業の進出がなければ、これだけ急激な経済発展はなかったのではないでしょうか。昨年の洪水被害にも関わらず、一社も撤退せず、今はMade in Thaiの日本商品が世界に輸出される時代になりました。例えば、アジアは自動車産業のデトロイトと言われるまでになり、すその産業にかかわる労働者数は計り知れません。

カムヒアン　今、2万社といわれる中国進出の日本企業が一斉にアセアン諸国に目を向け始めた。メコン5ヵ国に日本企業が加速度的に移転すれば、メコン5ヵ国の貧困削減の速度は速まるでしょう。

サンペット　日本企業はタイの管理職や中間管理職の育成を行い、信頼関係を構築しました。多分、日本企業の経営陣はメコンで新規工場を設立する場合、タイ進出の日本企業で働くタイ人の管理職や中間管理職を活用する可能性があると思います。

チャンディ　その意味で、メコン5ヵ国の連携は欠かせないと思います。カンボジア然り、ベトナム然り、ミャンマーも貧困削減をさらに進めるのに経済発展が欠かせません。日本企業の果たす役割はますます大きいです。

ダルニー奨学金の役目

サンペット　タイはスタート時から中学生向けの奨学金で、小作人等の貧困家庭の子どもに奨学金が授与されて中学校に通い始め、その影響で自作農の子どもも自費で中学校へ進学するようになりました。ダルニー奨学金は中学進学の社会現象を加速したと自負しています。

チャンディ　中学校の数が少なく、通学が困難な状況、かつ、中学教師の不足は、カンボジアもラオスも同様ですが、私が聞いたところでは、タイでは小学校に中学校を併設して小学生も中学通学が可能になったそうですね。そしてダルニー奨学金が小学校に付随した中学校に大量に奨学金を提供することで、先駆的な役割を果たしたと思います。カンボジアやラオスもそれに続きたいですね。

サンペット　確かにダルニー奨学金は、タイの中学義務教育化に大きな役割を果たしたといえるでしょう。タイでは経済発展により貧困層の数は減少しました。ただ、豊かな社会の中でも貧困は未だ存在し、その底辺の底上げにダルニー奨学金は必要です。

注1）11月のEDFの会議で、各国の理事長を秋尾が退任し、カムヒアとチャンディがそれぞれ引き継ぎました。
注2）EDF-Internationalの詳細につきましては、改めて報告します。

民際センターの将来

カムヒアン　ラオスの場合は、対象地域の小学校の就学率は約90%になり、卒業する子も増えてきました。ダルニー奨学金の重点を中学にシフトし、ラオスの中学教育に変化を作り、加速することで教育の変革に貢献したいと思います。

チャンディ　小学校卒だけでは、地域おこしも企業への就職も難しいので、これからの方向として、カンボジアも同様に今年度から中学奨学金を日本に要請しました。

サンペット　ラオスとカンボジアに加えて、タイのスタッフがベトナムとミャンマーでも活動拠点を構築し、今年度から奨学金事業を実施しました。メコン5ヵ国で教育支援を通し、貧困削減を実現するよう最大の努力をはかることが私たちの使命だと思います。

カムヒアン

チャンディ

メコン5ヵ国の連携の重要性とEDF-International

サンペット　タイの事務所の中核を担う人材は15～25年勤務のベテランです。彼らの持つ非営利団体の経営手法、募金活動、事業経験などを各国のスタッフが習得できる体制の整備、またグループ全体のICTの中核的役割等のグループ内の連携強化などを通じて、タイの人材の有効利用によって南南協力を実施し、教育交流を通し、メコン5カ国+日本の一体感を醸成することが私たちが目指す平和構築の姿です。

秋尾　現在、日本とタイだけで主に募金活動をしておりますが、インターネットを通したクレジットカードの寄付は、何時でも、何処でも、寄付できる時代になりました。日本発の国際教育協力団体が世界の人々から共感を得て、発展できたらと思います。そのために各国事務局の代表が理事となり、理事会を構成するメコン5+日本のEDF-Internationalを創設し、活動を始動しました。古希を迎えた私より、二世代若い次世代の3人が私を乗り越えて、EDFの発展に貢献することを確信しています。

タイ事務局が"NGO of the year 2012"を受賞

タイ事務局（EDF Thailand）は、タイNGO委員会（Thailand NGO Awards Committee）による2012年度の"NGO of the year 2012"の大手NGO部門の大賞に選ばれました。同委員会による表彰は昨年から始まり、今回が２回目。大手NGO部門の大賞に選ばれた理由として、同事務局が資源の有効活用、説明責任・透明性・持続性に優れていることが挙げられました。授与式には専務理事のサンペット、事業部長のプー、経理部長のナーが参加し、大賞の盾と副賞としての賞金20万バーツが授与されました。

左からプー、ナー、1人おいてサンペット

想像力と熱意で自発的に教育支援活動を展開する
大学生のグループ

学生団体SWITCH

「運動会」を通じて学生生活を充実させ、国際協力も実現

今年の運動会の参加者

学生団体SWITCHは、「楽しい」を入口に大学生活を充実させ、そこから学生や社会を変える波を引き起こすことを目的として活動しています。大学生活を充実させる要素の１つは「誰かのために何かをすること」。それで、大学生を対象に誰にも身近な運動会を開催し、運動会を通じて国際協力を行うことを企画しました。それが年1回の学生チャリティ大運動会「Charity Sports Festival」です。これまで関東圏で4回開催しました。

今年の運動会には857人の学生が参加しました。参加者は8色の色に分かれて騎馬戦や綱引きといった定番の競技や、運動が苦手な人も楽しむことができる○×ゲームなどの競技で色ごとに優勝をめざしました。その過程でチーム内でのつながりや多くの出会いを生みました。

こうした活動が、世界の貧困地域に暮らす子どもたちへの支援にもつながれば、自分たちの大学生活がより充実したものになると思い、今年から運動会の参加費の一部をダルニー奨学金に寄付しました。自分たちがスタディツアーで訪れる国の子どもたちを支援しているということと、自分たちが支援した子どもの顔が見えることが支援の理由です。

来年のチャリティ運動会は海外の要素を多く含めた運動会にする企画を立てています。例えば、私たちが国際協力の支援をしている団体のブースを多く出すことや、外国人留学生を多く呼ぶことなどです。

国外活動では昨年スタディツアーを企画し、バングラディッシュとラオスの村の小学校で運動会を行いました。運動会の内容を少しアレンジし、肩組みリレーや馬跳び競争、特別な道具がなくてもできる競技をとりいれ、言葉が通じなくても仲間を応援したり、チームで協力しあったりして無事運動会を行うことができました。来年はバングラデシュとカンボジアの小学校で運動会を開催する予定です。SWITCHに所属していない一般の学生もこのツアーに参加できるので、興味がありましたらSWITCHにお問い合わせください。

ラオスクールプロジェクト

校舎建設を目指しての募金活動、図書館建設、現地訪問

完成した図書館の前で

私がこの活動を始めたきっかけは、ダルニー奨学金を支援している高校の先生が「ラオスの子ども達のために新潟の学生でボランティア活動しないか」と呼びかけたことです。「教育」が一番身近で、その大切さを実感している学生だからこそ、ラオスの子ども達も教育によって夢を持ってもらいたいと考え、小学校の校舎建設を目的に資金集めの活動をスタートしました。街頭募金、フリーマーケットへの出店、チャリティーイベント、キャラバン。しかし3年目から建設費700万円という高額な費用に限界を感じ始めました。また、活動が長引くことで、700万円を集めること自体が目標になってしまい、「私達の活動は正しいのだろうか」と悶々とすることもありました。そんな中、民際センターから図書館建設の提案があり、メンバーで何度も話し合いました。そして、ラオス

方々の期待に早く応えたい、3年間で集まった約200万円で今出来ることをしたいとの思いから図書館建設に決めました。

図書館は今年7月に着工し2ヶ月でほぼ完成。9月に贈呈式に参加するために、仲間6人でラオスに行きました。場所はサワンナケット県のサイヤペット村。生徒数1,000人の小中学校と幼稚園が同じ敷地内にあり、図書館は敷地のちょうど真ん中に建っていました。贈呈式では、生徒代表の子が日本語で感謝のスピーチをしてくれました。出来たばかりの図書館で子ども達が本を読んでいる姿や、帰りに涙を流して私達を見送ってくれる姿を見て、図書館に変更して良かった、ラオスに来ることができて良かったと思いました。支援とは何なのか、改めて考えさせられた現地訪問でしたが、私達学生も3年半の活動で多くのことを学びました。ラオスクの支援活動はこれで終わりではなく、今後も図書館をベースに定期的に村を訪問し、子ども達と交流していきます。また、新潟の小中学生も巻き込んで、ラオスと日本の子ども達の繋がりも作っていけたらと考えています。(皆川真理恵)

Study for Two

約40の大学、300名の学生が中古の教科書販売で教育支援

中古の教科書を販売

STUDY FOR TWOは、勉強したいと願うすべての子どもたちが勉強できる世界を実現するため、まず国内の大学生に対して中古教科書回収販売事業を実施し、収益の80%を途上国の子どもたちへの教育支援としている団体です。中古教科書回収販売事業は①大学生から使い終えた教科書を回収する②回収した教科書を、安価で大学生に向け再販売する③収益8割を開発途上国の子どもたちへの奨学金として寄付する、というプロセスです。

この活動は、代表の石橋が大学1年生時に海外ボランティアに東南アジアに行ったことがきっかけです。そこで出会ったのは、自分と同じ"お金がない家庭"に生まれついたはずなのに、勉強したくても勉強できない子どもたち。自分は奨学金や様々な機会に恵まれ、勉強することができるにもかかわらず、彼らはお金がないから、機会がないから勉強できない。その差はどこの国に生まれついたか、それだけだと感じました。2年生になり、大学に戻ったとき、奨学金をかりて大学に行っている石橋には新品の教科書を何冊も購入することは気が重く、先輩から教科書をもらっていました。そんなとき彼がふと思いついたのが、この団体が始まったきっかけでありました。それから約2年半が過ぎましたが、いまでは全国約40大学、300名のメンバーが必死に活動しています。

収益金をなぜ国際協力への寄付するのか？石橋は「出会ってしまったから」、その一言に尽きると言います。今後は40大学にまで増えてきた支部をきちんと統制し、さらに大きな活動にしていきたいと考えています。2013年4月にはまた大きな教科書販売シーズンが来ます。そこで大きく売上を上げ、奨学金だけではなく、他の支援活動も実施していきたいと考えています。

早稲田大学生協学生委員会

文房具や食堂でのメニューの募金上乗せなどで支援 新しい募金方法も考案中

イベントでお手伝い

早稲田大学生協学生委員会とは、早稲田大学生協に属する、学生のみで構成された組織です。早稲田大学の組合員である学生が悩みや不安を解消し、魅力ある大学生活を実現する事が出来るように、日々活動している団体です。普段は生協の

組合員を対象としたイベントなどを企画したり、学生向けのフリーペーパーを発行したりしています。

早稲田大学生協学生委員会は、内部でいくつかの部局に分かれています。その中に「社会貢献」という部局があります。この部局は、早稲田大学生協学生委員会に所属している人の中でも特にボランティアに興味がある人で構成された部局です。民際センター様の募金活動などに参加しているのは、主にこの部局に所属している人です。

私たちが、数多くあるNGO団体の中でもあえて民際センターを支援しているのには、理由があります。それは、子どもの教育支援をする事によって子どもの将来に向けて投資をするといったダルニー奨学金のやり方に共感を得たことです。事務所が早稲田にあり、早稲田大学から近いので親近感があるというのも、支援する事に決めた理由の一つです。

支援する事を決めたのがおよそ10年前で、当時は書き損じたハガキを寄付するなどといった小さな事から始めました。それからだんだんと活動の幅を広げていき、今では民際センターと一緒になって募金活動を行うことはもちろん、早稲田大学生協で販売している文房具や、食堂で販売しているメニューに募金額を上乗せして販売するなどといった活動も行っています。

民際センターを支援すると決めてからは、もう随分経ちます。しかし、本格的に支援し始めたのは、2.3年前からです。そのため、まだまだ改善の余地があり、今までやってきた文房具や食堂メニューへの募金額上乗せ販売以外にも、なにか新しく出来る事がたくさんあるのではないかと私たちは考えており、定期的に話し合っています。今まで以上に活動の範囲をもっと広げ、更に民際センター様の力になるような活動をしていきたいです。

早稲田大学ラオス学校建設教育支援プロジェクト ～スーン～

毎年2週間、ラオスの小学校で「きっかけ教育」を実施

ラオスの学校で

スーンはラオス南部にあるチャンパサック県の小学校2校を対象に、教育支援活動を行っています。この活動は、ある学生がラオスを訪れた際、ラオスの教育現場における教員の質の低さ、教育に対する関心の低さや、手を洗う習慣や公共トイレを正しく使う習慣がないなど、衛生環境がよくない現状に対し、学生だからこそできるソフト面の支援をしたいという思いからスタートしました。

活動においては、私たちは子どもたちの視野を広げること、思考力を養うことに重点に、内容としては学科、衛生などの面からアプローチしています。そして、私たちの価値観の押しつけになってはいけないという考えから、「共に考え、共に感じる」という理念でアプローチしています。さらに、私たちが現地で問題を解決しようとするよりも、その問題を考えるきっかけを与える活動をした方が目標である「内発的発展」につながると考えたので、今は「きっかけ教育」という軸で活動をしています。

教育支援というのはなかなか成果がはっきりとは表れず、毎回自分たちの活動は本当にこれでよかったのだろうか、と考えてしまう面もあり、毎回試行錯誤しながら活動しています。しかし、私たちが訪れる2週間は生徒の出席率がとても良いという話を先生から伺ったり、自分の子どもが日本人の大学生が支援しているこの小学校に通えてラッキーだなどというお話を村人から伺ったりすると、私たちの活動が少しは役立っているのかなと感じることができます。

私たちの活動の成果は見えにくいかもしれませんが、これからも誠実に現地の方々と同じ目線に立って、一緒に考えながら活動を続けていきたいと思います。

民際センターとは、ラオスの教育支援という同じ領域で活動しているので、イベントなどで時々、ファンドレイジング活動のお手伝いをしています。

ミャンマーとベトナムで第1回目の奨学金授与式

今年度から始まったミャンマーとベトナムでの奨学金事業。
どちらも奨学生70名でスタートしました。

ミャンマー

校長先生「こんな小さな村にも支援が来て嬉しい」

2012年8月22日、3つの学校から集まった中学生70名に対して奨学金（学用品）が提供されました。授与式の前日、奨学金提供対象地区であるタンタービン郡（ヤンゴンから北西に約60キロ）の郡教育局事務所の担当者及び3校の校長先生と打ち合わせをし、翌日、授与式で奨学生に奨学金が提供されました。3つの中学校の校長先生のうちダウ校長先生（写真左の右端の女性）は「小さい村の中学校ゆえに、このような教育支援を受けたことがなく、奨学生たちはとても喜んでいる」と感謝の気持ちを述べました。

奨学生のひとり、ムグ・ミョは4人きょうだいの長男（写真右の右端の少年）。両親は日雇い労働者で収入は１日1〜2ドル。仕事がないとき、ムグは両親と森で食べ物を探します。両親は「苦しい生活なので、支援はとても助かります。長男なので仕事やきょうだいの世話などもしていますが、みなさんの支援を受けながら、なんとか高校を卒業させたい」と述べました。

右から校長先生、奨学生、EDFタイのプー

奨学生と関係者

奨学生の一人、ムグ・ミョ（右端）と家族

ベトナム

親に誓約書を書いてもらい、現金で奨学金を提供

2012年9月5日、ドンナイ省ティンクワン郡の２つの中学校に通う奨学生70名に奨学金を提供しました。授与式ではベトナム事務局（EDFベトナム）の事務局長ヴァンが挨拶を述べました。郡教育局の副局長トラン氏は「奨学金がなければドロップアウトしてしまう生徒への支援が目的です。郡教育局としても、この奨学金をサポートします」と述べました。

ベトナム奨学金は現金による提供です。学用品はきょうだいの上から下へ使い回しする習慣があり、各家庭ごとに必要なものが違うので、親に誓約書を書いて手渡しています。来年度からは各学期ごとに分割して手渡すことを検討中です。

今年度の奨学金には100名の申し込みがありました。どの生徒も経済的に貧しい生徒でしたが、各家庭の経済状況や親の有無などを考慮して70名を先行しました。奨学生の中には、1日の収入が40〜120円の生徒がいます。

奨学生に奨学金を授与

奨学生全員

書き損じハガキで奨学生を支援する企業・団体・学校の紹介

年賀ハガキのシーズンが来ました。お年玉当選番号の発表後、書き損じハガキを集めて、メコン地域の子どもたちを支援している多くの企業・団体・学校が今年もその活動に取り組みます。今号では以下、3つの取り組みを紹介します。

同財団に届いた証書と写真

バンナカエ校の竣工式

公益財団法人　オリックス財団

タイに建設した 2校の教育開発センターをきっかけに 書き損じハガキ収集などで奨学金支援

オリックスグループは、企業活動ではカバーしきれない教育や芸術などの分野における社会貢献を目的として2006年に「オリックス社会貢献基金」を設立し、2010年に公益財団法人オリックス財団に移行しました。

同グループは1978年にタイに現地法人を設立し、多くの関係者と良好な関係を築いたことから、タイへの支援、特にタイの教育支援を実施したいと考え、2007年にタイ東北地方のブリーラム県にバンホーセーラオ校、2008年にサコーンナコーン県にバンナカエ校にそれぞれ併設する「オリックス教育開発センター」を建設しました。そして同センターに450冊の図書、5台のパソコンなどを設置し、同校の教育の質と環境の向上に大きく貢献してきました。

これを機に、オリックス財団は2010年から書き損じハガキや切手、テレカなどを集め、タイの経済的に恵まれない子どもたちに奨学金を提供しています。収集方法は、お年玉の当選番号が発表された後、支援している子どもたちの写真を掲載した社内告知を北海道から沖縄までグループ各社に送ってハガキ、切手、テレカなどを集めます。そして集まったハガキや切手の総額と同額の金額を同財団が提供して（マッチング）、その合計額を奨学金として支援します。このような方法で、2010年から2012年の3年間に84人の子どもたちを支援しました。教育支援を受けた子どもたちがタイ国の発展に貢献する人材に成長することを期待して、オリックス財団は教育支援を続けています。

「ボランテ」に掲載された奨学生の写真

茨城県・境町社会福祉協議会

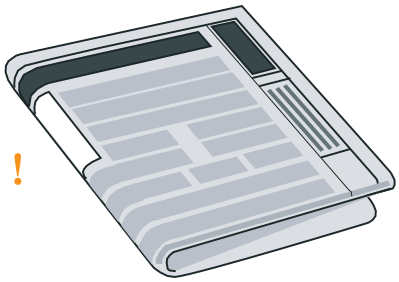
「もったいない」精神で、1997年以来ずっとタイの子を支援

地域の様々な社会福祉活動を行っている茨城県の境町社会福祉協議会は、その活動の１つとして1997年から書き損じはがき等を集めてタイの奨学生を支援しています。これまで1年も欠かさず、ほぼ毎年Aタイプでタイの奨学生を支援してきました。

支援のきっかけは同協議会で朗読のボランティアを行っている団体のリーダーが「こんな活動があるよ」とダルニー奨学金を紹介したことです。以来、年賀はがきが出る時期に「社協だより」

と境町ボランティア連絡協議会の広報紙「ボランテ」で書き損じハガキなどを集める呼びかけをしています。収集方法は、社協の善意銀行として窓口にハガキの収集箱を置いています。しかし、ハガキを箱に入れるより『書き損じはがきをもってきたよ』と窓口で手渡す人の方が多く、住民の皆さんが熱心に協力してくれるようです。現地から送られてきた奨学生の写真を広報紙に掲載していることも、ハガキを持ってきて支援する人が絶えない要因かもしれません。

書き損じハガキ280枚で子どもが１年間学校に行けるのなら、それを捨てずに活かす「もったいない」精神で、同協議会は息長く子どもたちをサポートしています。



奈良県・片塩中学校

新聞の掲載で外部からハガキや切手等が届いた！ 善意の活動が世間に通じて「嬉しい」

生徒会の生徒たち

恐らく2005年の秋頃だと思いますが、民際センター事務局から届いた「書き損じハガキによるタイ・ラオスの子どもたちの支援」ご案内のはがきを見て、奈良県大和高田市立片塩中学校は生徒会が支援活動に取り組むことに決めました。現金ではなく書き損じハガキで支援できること、同じ中学生であることなどが支援を始めた理由でした。以来毎年、年賀ハガキの当選番号が決まるちょっと前に、プリントの配布と校内放送で書き損じハガキの収集を生徒に告知し、抽選終了後、職員室前と生徒が出入りする昇降口前の3箇所に収集箱を設置。さらに登校時に生徒が呼びかけをします。こうして2005年度からずっと毎年、奨学生3〜10人分の書き損じハガキを集めてきました。

ところが、昨年は奨学生28人分を支援するハガキや切手、現金が集まりました。これは、民際センター事務局が地元の新聞社に同校の活動を記述したプレスリリースを送り、まず毎日新聞が取材をして記事にし、それを見た奈良新聞など他の新聞社がさらに取材して記事にしたためで、読者から同校にはがきや切手、現金などが送られてきたからです。その内訳は、同校で集めたハガキ1,108枚、外部から送られてきたハガキ267枚。切手は同校3,166円、外部148,897円、現金(募金)は同校24,722円、外部7,000円でした。送られてきたハガキや切手のうち、住所氏名のわかる分については、生徒会がお礼の手紙を書きました。担当の太田先生も生徒も「善意の活動が世の中に通じることがわかって嬉しかった」と言います。

生徒会の生徒たちは現地から送られてきた奨学生の写真を見て、「私たちの支援活動で、この子が学校に行けたんだぁ」と支援の成果を実感します。その実感に不特定多数の人たちからの支援を受けた昨年の喜びを重ねて、同校の生徒会は来年も1月になると支援活動を開始します。

お手伝いの大学生、大活躍でした!!

グローバルフェスタに参加。ダルニープレートなどで約11万円の募金！

10月6、7日の2日間、東京の日比谷公園で恒例の「グローバルフェスタ JAPAN 2012」が開催され、民際センターもブース出展しました。今年のグローバルフェスタは「Think Global, Think Green：世界を変えよう。未来をつくろう。」がテーマ。暑かったり、寒かったり、雨が降ったりの天候でしたが、たくさんの方が来場されました。民際センターのブースでは、ラオスの子どもや風景の写真展、水担ぎ体験などを行い、どちらも好評でした。また、当日は早稲田大学生協学生委員、早稲田大学ラオス学校建設教育支援プロジェクト ～スーン～ のメンバーの方にお手伝いをしていただきました。ダルニープレートでの募金集め、タイの料理セット「タイの台所」の販売等でパワー全開。その結果、募金金額はダルニープレートが101,486円、タイの台所10,000円で、合計111,486円。奨学金11人分！ ひとつのイベントでの募金額としてはすごい額です!!

また、かつて研修旅行に参加された方、長く支援をされている方、以前に在学していた中学校で支援活動をしたことがある若者たちがブースに立ち寄り、挨拶したり交流を深めたりしてくださいました。

ナナさんとメンバーの皆さん

楽しい時間のためにに使ったお金が、別の場所で大きな力になる

NGOゴスペル広場
代表　ナナ・ジェントル

ゴスペルを使って国際協力を始めたのは、12年前。それまでは、ただチラシを作ってみたり募金箱を作ってみたりしていました。憧れの地であった西アフリカを18歳で訪れ、日本と現地との格差を目の当たりにしたとき、自然と「日本でできることをしなくては」という思いに駆り立てられました。自分なりに現地のNGOと奨学金プロジェクトを立ち上げようとするも、そんな手作り企画にはなかなか募金が集まらず、現地とのコーディネートも難航し結局挫折。そんなとき、ふと自分の好きなゴスペルで何かできないかと思いつきました。「募金箱にお金を入れない人でも、自分が楽しい時間を過ごすためなら、お金を払ってくれるのではないか。」そこから「ゴスペルを歌うイベントを開き、参加費を国際協力へ」という今の活動スタイルができあがりました。

ダルニー奨学金は写真つきの報告書も届くので、参加者への報告も明快です。本格的にこの活動を自分の仕事にしようと4年前に独立して以来、今では全国に老若男女1,500人以上のメンバーができました。意気投合する仲間たちと楽しくゴスペルを歌いながら、月々の会費やイベント収益をラオスやカンボジアの子ども達の奨学金にしています。

事務局活用リスト

事務局ではさまざまな資料やサービスを用意して、ドナーの皆様のお問い合わせやご要望にお応えしています。
※ご利用につきましては、以下の要領でご連絡願います。

地域で奨学金や図書セットを広める活動をしたい

① 書き損じハガキ・未使用テレカの収集
② 使用済みインクカートリッジの収集
③ パンフレットまたはリーフレットの設置
④ 不要な本を集めてブックオフに送る
⑤ 募金箱を設置したい

お気軽にお電話またはメールでお問い合わせください。折り返し資料などをお送りします。また、ホームページでも紹介しておりますので是非ご覧ください。

奨学生や現地のビデオを見たい

DVDは現地情報満載の広報ビデオ(13分)。パネルを貸し出すこともができます。送料は負担願います。

個人でタイを訪問し、奨学生に会いたい

80円切手を貼った返信用の封筒をお送りください(メール可)。折り返し、資料をお送りします（3～5月と10月、学校はお休みのため訪問できません)。

タイの奨学生と文通したい

① 手紙の翻訳
② タイの切手購入

①：タイ語→日本語に翻訳します。手紙の原本と80円切手4枚を同封して送ってください。
②：タイ切手セット（12回分1000円）の代金は郵便定額小為替か現金でお願いします。
80円切手を貼った返信用の封筒も同封してください。
※奨学生の氏名をカタカナで読みたい方は、電話、メール、ファックスでお問い合わせ下さい。

民際事務局でボランティアをしたい

PC入力、DTP経験者、事務作業など。電話またはメールで担当、関口までお問い合わせください。

奨学金の説明を聞きたい

事務局では随時無料説明会を行っています。参加希望の方は必ずご予約ください。

毎年忘れずに送金したい

お申し込みいただければ、自動振込用紙（ゆうちょ銀行）を無料で送付します（タイのみ)。

編集後記

民際の25年を振り返ったついでに、私の思い出を1つ。5～6年前、タイのナコンパノム県から、その日夜の飛行機でバンコクに帰るつもりでした。時間が少しあったので、EDFがよく使うホテルに寄り、フロントの女性と雑談をしていると彼女が「EDFの人、日本人？ではMr. 加藤を知っている？」。加藤という名前はすぐピンときたので（63号2ページ参照）「うん、知っている」「お～！あなたは加藤の友達か！」と感激の様子。さらに雑談の中で、その日夜7時の飛行機は朝7時発の勘違いで、翌々日まで飛行機がないとのこと。翌日バンコク発深夜便で帰国する予定だったので、明日中にバンコクに戻らなければなりません。すると彼女は航空会社に電話をし、翌日隣の県から発つバンコク行きの飛行機を予約してくれました。航空会社に友達がいるらしく、間違った航空券で翌日の便に乗れるとのこと。そのホテルに泊まった翌日、非番の彼女がバス停まで送ってくれました。「いろいろとありがとう」「どういたしまして。あなたは加藤の友達だから」。彼女の行為には感謝・感激でした。その一方で「友達は、友達の友達にここまでする？！」「会社に友達がいると飛行機がタダになっちゃう！」と「友達ネットワークの力」に驚きました。（冨）

一般財団法人
民際センター

ダルニー通信　第６８号　　２０１２年１２月１日発行　　発行人：秋尾晃正
一般財団法人民際センター　〒162-0801 東京都新宿区山吹町337 江戸川橋東誠ビル5F
TEL ： 03-6457-5782　　FAX ： 03-6457-5783
Eメール：info@minsai.org　　ホームページ：http://www.minsai.org/
振替口座：００１５０－０－５７６６４
表紙：ラオス　　撮影：渡部 明浩

―紙面レイアウト協力―
吉田シャショク　福岡県大牟田市小浜町1-5-17　☎944-51-8604

ポンサイ(Phonxay)小学校

毎週水曜日にランチが提供されます。ランチの食材として、朝顔菜、玉ねぎ、レタス、コリアンダー、キャベツ、トマト等を栽培します。また養鶏やナマズの養殖なども行います。

上はナマズのいけす

SPOT LIGHT

公益財団法人浦上食品・食文化振興財団から委託を受けたランチプロジェクトがラオスでいよいよスタート

**ラオスでは、貧困のため昼食を食べることができない子どもたちがたくさんいます。
このプロジェクトは、生徒全員にランチを提供するということが大きな目標の一つです。
併せて、まずこの3校をモデル校として事業を行い、
将来はさらに多くの学校にランチプロジェクトを広げたいと思います。**

ハドシェンジー(Hadxiengdy)小中学校

毎週木曜日にランチが提供されます。野菜の栽培に加え健康促進事業として、台所の掃除、食後の歯磨き、手洗いの指導なども行います。